

## 第5章 悲劇

### 失敗談

人は成功したり、失敗したりします。他人にしたいのは成功談だが、聞かされた方は、「また自慢話か」と思うだけで、感動がない。それに比べて失敗談は、だれでも興味深く聞く。週刊誌が売れ続けるのが、そのよい例です。

失敗はだれにでも起こるからです。偉い人でも、自分と同じ失敗をするので。しかし、偉い人の成功した話は、一握りの人の事で、一般人には当てはまりません。ノーベル賞をもらった、宇宙飛行士になった、指揮者になった、などの華々しい成功の話は、特殊な人の話であって、聞いても参考にはなりません。一般人には無縁の事です。

人に聞いてもらえるなら、自分の失敗談を話すのがいいようです。「うまくできませんでした」「このように失敗しました」と話すと、聞いている人の共感が得られます。成功は、その人だけのことですが、失敗は、だれにでも起きることだからです。

たとえば、日本人は野口英世の伝記が好きです。この成功者にも、失敗談が付いています。野口英世は、幼い頃、囲炉裏に落ち火傷で左手の五本指が癒着してしまった。十五歳の時、手術を受ける。不自由ながらも左手の指が使えるようになった。手術がきつかけで医師を目指す。猛勉強の末、医師免許取得した。この間にも臨床試験で必須の打診ができないことから、左手の無償再手術を受ける。その結果、打診が可能になり試験にも合格。二十一歳で医師免許を取得した。医師免許取得後、開業資金がなく、また左手を患者に見られたくないという理由から、開業医の道を断念した。その後、アメリカに渡り細菌の研究に打ち込んで研究者として大成した。

いつも生活費はなく、ベストセラーになった本『借りた金は返すな』の先がけのような人生だった。気がいい村の庄屋さんは、自分の家が傾くほど援助するのだが、アメリカ帰りの手土産は、懐中時計一個だった。庄屋の家族が怒り狂った映画『遠き落日』は、かつてない人気で、映画館前に長い列ができた。英世は今、千円札の顔になっていると知ったら、どんなに驚き、戸惑う事でしょう。伝記には、一般の人が共感する失敗談があるので長く愛読されるのです。このように、失敗談は成功談よりはるかに面白い。

映画の中で、英世の母は英世が成功者になった時、磐梯山に向かって万歳を叫んだ。感無量だった。母は、息子が貧しい境遇から大成した事はわかっていたが、歴史に残る細菌の研究については理解していなかった。

◆磐梯山は、福島県耶麻郡の猪苗代町・磐梯町・北塩原村の三町村にまたがる山。会津富士、会津磐梯山とも呼ばれている。日本百名山の一つ。

和田アキ子さんが歌った映画の主題歌『愛、とどきますか』（作詞…なかにし礼 作曲編曲…林哲司）も大ヒットした。映画だけでなく、歌もみんなを泣かせた。私などは号泣した。和田アキ子さんの歌では、この歌が一番いい。今、歌ってほしい歌です。

◆野口英世は、細菌学者。明治九年（一八七六年）十一月九日、福島県生まれ。猪苗代高等小学校卒業、済生学舎（現在の日本医科大学）修了後、ペンシルベニア大学医学部を経て、ロックフェラー医学研究所研究員。細菌学の研究に主に従事し、黄熱病や梅毒等の研究で知られる。数々の論文を発表し、ノーベル生理学・医学賞の候補に三度名前が挙がったが、黄熱病の研究中に自身も罹患し、昭和三年（一九二八年）五月二十一日、アフリカのガーナのアクラにて五十一歳で亡くなりました。夫人はメリー・ロレッタ・ダージス。子どもはいない。

## 誤解

誤解は思い込みなので、解けた瞬間、仰天します。

### 「イチロー」への誤解

アメリカの大リーグで活躍しているイチロー選手は、「朝カレー」を食べる。白い大きなお皿に少しのご飯。それにカレー汁がかかっているだけ。ほとんど具がない。煮込みであるからか。朝食はそれだけだ。テレビを観ていた私は驚いた。

収入があるのに、なんと粗末な朝食なのだろう。奥さんは、元アナウンサーだから教養はあるが料理はできないのだろう。これではイチローがかわいそうだと思った。

しかし、それは誤解でした。イチローは体調管理のため計画的に朝はカレーにしているのだそうです。この報道の後、わが家でも時々「朝カレー」（ハウスバーモントカレー「甘口」）の日がある。夜作ったカレーは、おいしい。そして忙しい朝は、簡単なカレーが一番便利だ。

全力で挑んだ平成二十四年のシリーズ、イチローは「魔法使い」と呼ばれていた頃の活躍を取り戻し、ヤンキースの地区優勝に貢献した。それを支えたのは妻の笑顔と「朝カレー」だった。愛犬「一休」も。イチローは「笑って野球人生を終わらせたい。笑って死にたい」と言った。かっこいいが、まじめ過ぎる。

### 「食器洗い」の誤解

「今日は、流しがきれいになっていいると思いませんか。僕が食器を洗ったのです。生ゴミもない。気がつきましたか」「私が洗ったのかと思った」。その日は雨が降り、そして雪が舞った。

### 「三億円事件」の誤解

高校時代に、東京都府中市で発生した三億円事件があった。それは昭和四十三年（一九六八年）十二月十日、府中刑務所の北側に面している学園通りで起こった。刑務所の向かいには都立府中高校がある。警察の必死のローラー作戦にもかかわらず、犯人は逮捕されないまま時効になった。

犯人はだれだったのか。三億円は、どこに行ってしまったのか。遺留品が沢山あったので、みんなが探偵にでもなったように事件を推理した。「こうではないか」「ああではないか」と騒いだ。いくつもの本が出版されベストセラーになった。映画が作られ、テレビドラマもヒットした。それほど誰もが関心を抱く事件だった。平成二十五年の秋にも有名タレントの主演でテレビドラマが放映された。

この事件では、間違つて逮捕された青年がいた。府中市に住む運転手の容疑者は事件当時、二十五歳でした。住まいや過去の運転手の仕事から現場の地理に精通していること、血液型が脅迫状の切手と同じB型、タイプライターを使う能力を持っていること、友人に送った手紙が犯行声明文と文章心理が似ていること、モニタージユ写真の男と酷似していることなどから一万二千三百一人目の容疑者候補として浮上した。

一年後、新聞・週刊誌・テレビ・ラジオなどの報道にあおられる形で警察は別件逮捕し、事情聴取した。彼は事件当日のアリバイを証明できなかった。その日の事、一年前の十二月十日の事を忘れていた。普通の人なら当然です。逮捕された彼は、報道陣から石を投げつけられ、唾をはきかけられ、罵声を浴びせられた。マスコミは実名で中傷記事を書いた。「軟弱な男」「無口で目立たない」「成績は中の下」などと報道した。青年の小学校、中学校時代の友だちや先生は、口々に「信じられない」と言った。小学校、中学校の卒業文集なども公開されたが、凶悪犯罪とは、ほど遠い人物だった。

彼は、事件当日にタクシー運転手の面接を受けていた。報道を見た会社の面接担当者からの連

絡でアリバイが証明され、完全なシロとして釈放された。彼は、面接場所を記憶違いしていた。会社の面接担当者が申し出なければ、そのままであった。警察当局は、テレビの会見で陳謝した。それで終わった。現在、この月の新聞縮刷版・当日のマイクロフィルム紙面は、各社共封印している。つまり入手も閲覧も出来ない。自分たちの失敗を闇に葬ってしまった。

しかし、その後の彼には過酷な試練が待っていた。警察に容疑者として逮捕されただけでなく、マスコミが犯人扱いで学歴、職歴、性格、家庭環境まで事細かく暴露した結果、職を失い一家は離散した。さらに、その後も真犯人が見つからない中で、「三億円事件の容疑者として逮捕された」との世間の偏見と、事件に関するコメントを執拗に求めるマスコミ関係者に悩まされ職を転々とし、平成二十年九月に自殺した。

三億円事件は、熱狂的だった学生運動が終結に向かっていった時代で、自分の意見を持たず、仲間と同調しない、おとなしい若者が増えつつあった、そんな時に事件は起きた。誤認逮捕された青年は普通の人だった。この話は三億円事件が話題になるたびに思い出されます。青年に対して、世の中は、ひどい扱いをしました。無罪放免になっても、それまでの生活を取り戻すことはできなかつた。普通の日常は二度と再び返って来る事はなかつた。彼は自ら命を絶ち闇の中に消えた。人々は三億円事件は覚えていても、誤認逮捕された彼の事を、すぐに忘れた。三億円事件は最も奇妙な未解決事件になった。

## 「サングラス」の誤解

ある夏の昼下がりに、サングラスをかけた女性が家に来た。女性はピアノ教室の生徒の母親であった。「美香（仮名）は、どうですか」と聞かれたので、「毎回熱心に通っています。ピアノを弾くのが好きなようです」と言う。母親は喜んだ。そして、たまっていた月謝を支払って、「これから美香を、よろしくお願いいたします」と挨拶して帰って行った。普通の母親であった。しかし先生と話すのにサングラスをしているのが気になった。夏だからサングラスは当然かとも思い、この件は、すぐ忘れた。

秋が過ぎ、冬が来た。気がつくとき美香ちゃんは夏物のスカートに素足だった。「今日は、寒いよ。これでは風邪をひくよ。帰ったらズボンと靴下を履くようにね」と私が言うと、「はい」と言った。「ほらほら冷たいでしょう」と、素足に私が触ると、転げまわって笑った。鬱積した物を吐き出すような笑い声だった。

月謝は次第に月末の支払いとなった。「お父さんが、よごした」と言って、四つに折りたたんだ一万円札を、むき出しで持って来るようになった。「おつりを失くさないように持ち帰り、すぐお父さんに渡すようにね」と私が言うと、「はい」と言った。素直な子だった。そもそも、先生におつりを出させる親の気が知れない。あらかじめ用意をしておくべきだというのが、私の認識だった。

ある日、美香ちゃんの親戚の人が、自分の子どもを連れてピアノ教室の入会に来た。美香ちゃんの母親が癌で亡くなった事を聞いた。夏だからサングラスをしていたわけではなかった。具合

が悪かったのでしょうか。美香ちゃんは、中学校を卒業するまでピアノ教室に来ていた。

### 「梅さん」の誤解

近所に梅（仮名）さんという男が住んでいた。ある正月、東京から来た孫に風を上げて見せていた。風は北風に乗って大空高く舞った。ヤッコ風だった。梅さんはニコニコ大満足だった。

次に梅さんを見たのは歯科医院だった。私は出産すると歯がボロボロになった。それで治療に通っていた。私が行くたびに梅さんに会った。梅さんは入歯を作っていた。歯医者にも会計の人にも丁寧に挨拶をしていた。スリッパをきちんと脱ぎ、揃えた。普通のおじいさんだった。

梅さんが亡くなると、町の人は「名物男が死んだ」「だれにでもからんで来て、ひとくせも、ふたくせもある男だったなあ」と言った。隣りの家の境目の石、田の水回り、組や寺の役、ゴミの出し方など細かい事にうるさかったようだ。梅さんに悪い印象を持っていない私は、あまりの言われように亜然とした。そして、入歯を作っただけで少ししか使わずに亡くなってしまった事を残念に思った。

悪く思われている人でも好意的に見られている場合もあるものです。

### 「嫁」の誤解

そのおじいさんは、母の教え子だった。「先生の家に、よく遊びに行つて、お菓子をもらった」と言っていた。



ある日、その家にシートが被せられ、大工が入っていたので、「どうしたのですか」と聞くと、「嫁が、二階のベランダに植木鉢を並べて水をやっているうちに、ベランダの板が腐ったので、直してもらうんだ。嫁には今後世話になるから叱ったりしないんだ」と笑って話した。

それから七年後、おじいさんの家の中からお嫁さんのキツイ声が響いた。「今、散歩から帰ったばかりだから、もう外には出ないで」。そういえば、おじいさんは、時折一人で橋の上や、踏切の近くに、たたずんでいたりする。自分の家がわからなくなってしまうようであった。痴呆が来ているのかもしれない。おじいさんの「嫁には今後世話になるから」という切実な思いが、お嫁さんに伝わっていただろうか。思いは言葉にしなければ伝わらないものです。

ある日、おじいさんの家からゴミの袋を持ったお嫁さんが出て来た。その人は介護のプロで、町の介護指導員もしていた。介護には体力があるので、寺の山の坂道を駆け上がる訓練をしていた。訓練には男の人が付き添い、タイムを計っていた。坂道を走る姿は、男性のようにはくましかった。「やんわりと優しい物腰のおじいさんの家のお嫁さんが、この人だったのか」、私は、いつまでも納得できなかった。

### 「山形県」の誤解

山形県というと「ド田舎」のイメージがあるらしい。朝のNHK連続ドラマ『梅ちゃん先生』でも、食堂に備え付けられた新しいテレビのニュースで、山形の農家の暮らしが紹介された。米の収穫、棒に稲穂を干す、俵を編む。米を東京などに出荷する。「おらとこの家の近くです」と

中卒の出稼ぎ、金の卵の少年が言った。

サスペンスドラマでは、山形から出て来たばかりの男が、連れ込みホテルで女を襲い殺人事件を起こす。刑事ドラマでは強盗犯の男が「山形出身の後藤です。貧しかったから、やってしまいました」と言っつてうつつむく。

山形県は果物が美味しい。サクランボ、スモモ、プラム、スイカ、桃、洋ナシ、ブドウ、そしてリンゴ。サクランボは、佐藤錦、紅秀峰、ナポレオン、ジャボレー、フジヤマ、高砂などの種類がある。私は「ナポレオン」が好き。スモモには「太陽」という粹な名前がついている。野菜も採れる。米「つや姫」は日本一美味しい。朝採りコーンの缶詰は世界一美味しい。

政府の方針によりサクランボの輸入自由化があった。山形県の農協が猛反対したが施行され、アメリカンチェリーが輸入された。結果はどうか、日本の消費者は美味しい山形のサクランボを買った。アメリカンチェリーは美味しくない。美味しい物を作れば、それを消費者は買う。他の商品も同じです。田舎だからこそ農業が自慢できる。

しかし、輸入品にかけ税を引き下げる「環太平洋経済連携協定（TPP）」が結ばれれば、外国産の安い農作物が日本にいくらでも入って来る。特に肉は、美味しい米沢牛でも安い肉には太刀打ちできない。畜産業はやって行けなくなる。競争に強い農家を育てなければいけないのだが、過去に減反政策をしてしまった日本の農業は厳しいものがある。

東日本大震災では、多くの避難者を真っ先に受け入れたのは山形県だった。奥羽山脈により、地震や津波からも、福島原発の放射能漏れからも山形県は難を逃れた。東京電力福島第一原子力

発電所事故後、福島県から全国最多の約一万七千人の避難者を受け入れている。母子避難者には就労支援をしている。山形県は頼もしい。

### 「変人」の誤解

三十年前、親しくしている奥さんが教えてくれた。「みんなが、あなたの事を『変人』と言っているわよ」と。「私が？　そうですか」。

いったんレッテルが貼られると、どうなるか。それ以来、町の大きな役は来なくなった。みんなが、変人には重要な役は任せられないと思ったのでしよう。

私は自分を変人とは思っていない。

ある日、夫に「私って変人？」と聞いてみた。すると夫が言った。「あなたほど変わっている人はいない。自分で変人と思っていないの？」「そうかな」。

今日、童謡の会員が「私が作ったイチゴのジャムです」と言ってジャムを持って来てくれた。

それは世にも美しい赤い色をしていた。興奮して、ピンを天高く捧げ持って「カー リーン カカ リーン カカ リーン カマヤ 庭にはイチゴ 私のマリнка ヘイ！」と歌い踊った。夫が驚いて飛んで来て「どうした？」と聞いた。

◆「カリнка」はロシアの婚礼歌。「カリнка」は、歌ではイチゴで代用していますが、赤い実を付けるスイカズラ科の灌木「カニバク」の愛称。ロシアでは「カリナ」は、若い独身女性の象徴で縁起のいい植物。

## 誤解の解決策

対人関係に悩んでいる人は多い。初対面の人とうまく話せない人は、先に「僕はシャイなんです。顔があげられなくて、目を合わせて話せないので。よく誤解されます」と言うとうい。先手必勝です。相手は必ず「そうですか。僕も」と同情してくれる。

NHK『スタジオパークから こんにちは』にタレントのIKKOさんが出演した。対談の前に、「私って人の話を聞かないのよ」と言った。司会者は笑顔で「そうですか」と答えた。話は一方的に終わったが、なかなかおもしろかった。IKKOさんは、男として生まれ、女として生きている。「おかま」と言われた時代の話になると涙ぐんでしまう。心は優しい女。誤解が多い事だけ理解できる。生まれ育った下品な話し方は、心がけ次第で改善されます。流行語になった「どんでんだけエ」を連発するのは、やめたほうがいい。

## つぶやき

人の**つぶやき**は本音です。

## 「牧師」の**つぶやき**

町に小さな教会がある。昔、教会にはアメリカ人の牧師が住んでいた。この牧師は、おおらかな人柄だったので、町の人々から慕われていた。日曜日の午前にはミサが行われ、近所の子ども

たちや大人の信者が集まった。また、平日の午後には、子どもたちにボランティアで英語を教えていた。

ある年のクリスマスが近い日、青年や子どもたちが集まって、クリスマスの準備をした。招待状を作ったり、飾り付けをしたり、讃美歌の練習をした。教会には足踏みオルガンがあり、私が讃美歌の伴奏をした。

クリスマスは、雪が降らないものの寒い日だった。夜は、しんしんと冷えた。子どもたちは口々に「寒い、寒い！」と言った。すると牧師が「自分の家は、もっと寒いのに、ここに来ると、みんなが『寒い、寒い！』と言う」と呟いた。

クリスマス集会は、大勢の人が集まり、讃美歌を歌い、牧師の話聞き、ゲームをして終わった。ゲームの賞品は、牧師の手作りのリボンの人形だった。集まった人たちは満足して帰宅した。私は、牧師の呟きを今でも覚えている。牧師は、普通のおばさんだった。神様ではなく、牧師という職業の人だった。私は、このクリスマスを最後に、教会に行かなくなった。その後、牧師がアメリカに帰国して亡くなったと聞いた。とても悲しかった。知っている人の訃報を聞くのは悲しいものです。

### 「耳鼻科職員」の呟き

長女は保育園に入園するまで病気をした事がなかった。保育園に入園すると、すぐ風邪をひいた。そして中耳炎になった。病気というものを知らなかった私は、一回の治療の後、耳鼻科に連

れて行くのをやめてしまった。すると、繰り返し中耳炎を発症した。そのたびに切開して膿を出した。ドロツとした黄色い膿が脱脂綿についた。中耳炎の事を知らないで、病院から帰宅すると保育園に行かせた。入園したばかりの保育園を休ませるといふ考えがなかった。娘は保育園が大好きだった。

小学校一年生の夏が来て、いつもかかっている耳鼻科に予約を取りに行く、番号札が百番だった。午前中に、百人以上が診察に来るのか？ 私は驚いた。しかたがないので、足柄上病院の耳鼻科に行った。こちらにも混んでいた。五人ずつ名前を呼んでいた。二時間も、三時間も待つてから、もうお昼を過ぎた頃、娘の名前が呼ばれた。白衣を着た職員の女性が患者の名前を呼んでいるのだが、だれも返事をしない。娘もしなかった。すると、その職員が呟いた。「ああ、そうね、ここは耳鼻科ね、聞こえないのよね」と。そして「まあいいわ」と言った。

娘は中耳炎のたびに切開していたので、両耳の聴力が無くなっていった。後ろから名前を呼んでも返事をしなかった。足柄上病院の若い先生は、「こりや、いかん、すぐ手術だ。暴れないように抑えて、お母さんは足を抑えてください」。大きな注射器を耳に射し込んだ。「一瞬鼓膜に針を通します。動くとき鼓膜が破れて二度と聞こえなくなってしまうです」。

看護婦さんが持っているシャーレーにゼリーのようなドロドロした透明な液体が出た。「こんなに溜まっていた」。娘は我慢強かった。泣いたり暴れたりしなかった。小学校二年生になると、聴力も体力も回復した。正常になった。

最初に行った病院は、何の説明もなかった。その治療は古い治療だと後でわかった。私の不注

意で中耳炎をこじらせてしまった事を娘に謝りたい。聴力検査室には一人で入って恐かっただろう。ピンク色の薬を四時間おきに飲むために夜中に起こした。薬を飲んでいるので食欲が無く痩せ細っていた。娘は他の同じ年齢の子どもたちが外で元気に遊んでいた頃、薄暗い耳鼻科の待合室で、じつと本を読んで待っていた。

病気は、腕の良い医者に、最先端の医療で完治するまで診てもらおう事です。足柄上病院には当時、二人の医者が交代で東海大学病院から派遣されていた。その後、一時、耳鼻科は無くなったが、現在また再開している。

ところで、最近はいろいろな場面で名前を呼ばれても返事をしないだけでなく、何の合図もしない人が増えているように思う。この耳鼻科の場合は、付き添っている人が返事をすべきでした。黙っているのは、何もわかりません。

### 「娘」の眩き

長女が小さかった頃、階段の途中でつまずいた。つまずいたのがわかったので、すぐに出てみようかと思ったが、次の瞬間、娘の眩きが聞こえた。

「泣いちゃおうかな？」この眩きは小さい声だった。続いて「♪泣いちゃおうかな、泣いちゃおうかなー、なーいちゃオオかな、泣いちゃオオかなーッ アア、泣いちゃオオかなー」と大歌になった。そのまま階下に降り、おばあちゃん、おじいちゃんたちのいる台所の方に行ってしまった。

一回目は、つまずいて痛かったのだろうが、その痛さは、たいした事がなかったのだろう。お母さんが助けてくれるだろうと思つたが、来なかつたので、大歌になつた。子どもは、このように瞬時に計算をする場合があるが、捻挫などの事故のこともあるので油断はできない。

子どもだけでなく、大人も同じで、ここで怒鳴りつけてしまうか、穏やかに話すか考える時がある。瞬時に判断しなければならぬ場合、頭が混乱しているので穏やかに話すことはなく、決まって子どもを怒鳴りつけてしまう。結果は、子どもが泣くだけで失敗となる。なかなか穏やかに話せないものです。子育ての一番の課題である「教え育む」は難しい。

### 「散歩」の眩き

家の前の道を犬を連れて近所の主婦が通つた。母から多額の金を借りて返せなくなり、わが家の玄関で巨体を丸めて「土下座」した女だ。門の所の郵便受けから郵便を取っている私を見て「きたねえな」と呟いた。私は耳を疑つた。急いで台所にある鏡で自分を見た。おや？ズボンの右のお尻の部分が泥だらけだ。座り込んで草むしりをしていたからだ。次に、「一瞬なのに、よく見ているな」と感心した。ズボンはすぐ洗濯をした。

草むしりをするのに、きれいな洋服は着ない。だれでもそうだ。一方、犬の散歩には、しゃれた服を着て、化粧をし、帽子をかぶる。犬にも洋服を着せる。「かわいいね」と言われれば嬉しい。月に一、二回はカット、シャンプー、爪切りに多額のお金をかける。しかし、田舎の風景の中では、百姓女と散歩女の服装の差はない。



テレビ時代劇『木枯し紋次郎』で、紋次郎（演・中村敦夫）を捜している地元のヤクザが、通りかかる紋次郎を見て「きたねえな、あいつが噂の紋次郎か」と言う場面がある。私は、それを思い出して笑った。

### 『お巡りさん』の眩暈

J R 東海・御殿場線の山北駅に保存してある汽車「D5270」の撮影に行った。この日は、町中の人々が楽しみにしている「産業祭り」が行われていた。人ごみの中、私はウキウキした気分になった。夫は私の事を「イベントおばさん」と呼ぶ。

御殿場の富士・自衛隊の吹奏楽隊と山北中学校のブラスバンド部の合同演奏があつた。二曲目の『花は咲く』の初めに、十二時を知らせる町のチャイムが鳴った。だいなしだった。指揮者の自衛官も、「静かな出だしが大事だったのに」と残念がった。自衛隊員は全員痩せていて、背丈がそろっている。中学生のブラスバンド部員は女子ばかりだ。プロの演奏者との共演は中学生にとって勉強になったと思う。東京の化粧をした中学生と比べると、その素朴なのに驚くばかりだった。二曲指揮をした顧問の先生も山北中学校出身とのこと。親しみやすそうな好青年だ。子育ては田舎に限ると思った。

駅前の交番にいた若いおまわりさんに道を尋ねた。背が高く、ハンサムなおまわりさんは、「今日は、産業祭りか」と眩いた。のんびりした町です。上空には飛行機雲。秋晴れの一日を楽しんだ。産業祭りで買ったミカン、「すっぱいッ」。

## 「観客」の眩き

「裸だったわね」という女の人の眩きが聞こえた。そのピアノニストは、両肩にヒモが無い、胸から上があらわになったドレスを着ていた。会場は小さな喫茶店で、演奏者に手がとどきそうな所まで客がいた。ピアノの演奏会などめつたにない田舎のできごとでした。演奏曲目は覚えていない。

別の日、小田原市民会館大ホールで『中村絃子ピアノリサイタル』があった。ホールは満席だった。前列中央の男の子が暴れていた。悪い事に、その男の子はピアノを弾いていて、右の目線に入る位置にいた。私は気が気ではなかった。中村絃子さんは、第一部の曲が終わって引き上げる時、壇上から暴れていた男の子に注意をした。かがみ込んで注意をしたので、観客全員が何事だろうと驚いた。ピアノニストが客に注意する事は、普通ではありえませんが、この場合は引率者が注意すべきでした。「小田原では、子どものマナーがなっていないかった」と、悪い印象を与えてしまい残念でした。暴れていた男の子と、一緒に来ていたおばあさんは、休憩の時になくなりました。一列目の中央が二席も空き、もつたいなかった。私は、華やかな演奏をして聴衆を楽しませてくれる中村絃子さんが大好きでした。

◆中村絃子は、一九五四年の全日本学生音楽コンクールピアノ部門小学生の部で全国第一位入賞。慶應義塾中等部に進み、一九五八年、全日本学生コンクールピアノ部門中学生の部で全国第一位入賞。一九五九年、日本音楽コンクールで第一位特賞を受賞した。一九六〇年に岩城宏之指揮の東京フィルハーモニー交響楽団の演奏会にソリストとしてデビュー。同年、NHK交響楽団初の世界ツアーのソリストに抜擢された。

同行指揮者は外山雄三と岩城宏之。

中村絃子さんのかわいい振袖姿のコンサートはテレビで繰り返し放送され、歴史に残っている。アンコールで何度もステージに呼び戻された中村さんは不機嫌だった。後日、「海外演奏旅行という事で、振袖を着せられた。長い袂が邪魔をして弾きにくかった。ピアノの演奏には、水着とか腕には何も無いものを着るのが一番いい」と言っていた。

興味深い本、許光俊著『世界最高のピアニスト』（光文社新書）を読んで行くと、世界のピアニスト「アフアナシエフ」「ケンプ」「ホロヴィッツ」「グルダ」「ポリーニ」「アルゲリッチ」「グールド」などの終章「それ以外の名ピアニストたち」に、日本のピアニストとして中村絃子さんが紹介されている。

「昔からのファンが多い。国内の隅々まで知れ渡っているという点でもっとも有名な邦人ピアニストと言って過言ではあるまい。地方のホールも満席にできる集客力という点では、彼女以上のピアニストはいないだろう。エッセイストとしても一流である。さりげなく悪意がこもった文章が書けるのは女性ならではだ。猫好きでも知られる」と紹介されていた。「地方のホールも満席にできる集客力」とは、まさに小田原の時のコンサートの事だと苦笑した。

### 「赤い靴」の眩き

娘たちは小学生の時、土曜日になると平塚の公民館で行われている「お話の会」に参加していた。

最初は私がついて行ったが、次からは娘たちだけで御殿場線に乗って行った。「お話の会」は「素語り」。サークルの人たちは全員素人で、指導者は、「ムーミンママ」の声の女優さんだった。それで、この「お話の会」は人気だった。何人かの人が一話ずつ子どもたちに語って聞かせた。しかし、あまりうまくなかった。最後に声優さんが話すと、うまかった。みんな満足して帰宅した。次回の予告があった。次回は、アンデルセン童話『赤い靴』、赤い靴を履いた貧しい女の子の悲劇だ。娘たちは松田町の図書館で下調べをして、自分たちも話せるくらい覚えて「お話の会」に行った。

『赤い靴』のお話が始まった。しばらくすると悲劇が素語りの人を襲った。妹が呟いた「足がもげるほど痛いんだよ」と。姉も呟いた「爪から血が流れるんだよ」と。これから話すところを耳にしてしまった素語りの人は、頭が真っ白になってしまったようだった。少しもどって話し始めたが、続かなかつた。もう一度少しもどって見たが、思い出せなかつた。覚えていた所だけを語り、なんとか終わらせた。話はつながらないまままで終わってしまった。帰宅した娘たちは、以後、平塚の公民館に行かなくなった。

平成二十七年（二〇一五年）五月一日、「ムーミン」の切手が売り出された。「ムーミン」の切手が売られているのはフィンランドと日本だけ。あらためて切手をよく見ると、大好きな吟遊詩人の「スナフキン」がパイプでタバコを吸っている。「スナフキン」は、いったい何歳なのだろう？ 私はタバコを吸う男が嫌い。

ママになった娘（姉）は、『ムーミン』の絵本を自分の息子に読み聞かせをしている。「ムーミ

ン、大好き、いいよね」と言いながら。

### 「末期癌の若者」の眩き

外は晴天、若者は病院の四階の窓から路上を見ていた。青信号になると腰の曲がったおばあさんが杖について元気に横断歩道を渡った。それを見た若者は「おばあさん、その命、僕にください」と眩いた。若者は今、医者から余命三ヶ月の癌の告知を受けたばかりだった。

この話は、手塚治虫著『ブラック・ジャック』の漫画に描いてあったはずなのに、今日見ると、どのページに描いてあったかわからない。いくら探してもない。私は、もう一度見たいと思っている。

近年、自殺が増えている。この末期癌の若者のように、病気で一分一秒でも長く生きたいと願っている人がいる中で、自ら命を絶つことは許されることではない。

### 映画『恍惚の人』の眩き

昭和四十七年、有吉佐和子原作の『恍惚の人』（新潮社）が出版されるとベストセラーになった。翌年には森繁久彌主演で映画化された。痴呆を抱えた老父を演じる森繁の真に迫る演技が話題となった。本当に痴呆になったかと、みんなが驚いたほどだった。脚本・松山善三。

痴呆になった老父の息子（演・田村高廣）は会社勤めがあり、介護は嫁（演・高峰秀子）が一手に引き受けざるをえなかった。妹（演・乙羽信子）は遠方に住んでいたので手伝う事はなかつ

た。受験生である孫も、徘徊する老人に振り回され受験勉強どころではなくなつた。家の中は暗くなつて行つた。

ラストは、さんざん家族に迷惑をかけた痴呆の老父が亡くなる。受験生の子が「もうちよつと、生かしておいても良かったね」と呟くように言う。この台詞が、みんなの気持ちを代弁している。人は、いつか死ぬ。残された人は、だれが死んでも「もう少し長生きをしてほしかった」「もっと長生きをさせたかった」と思うものです。

## 怒鳴る

大声を出す、大声で叱る。怒鳴り声ほど嫌なものはありません。

## 「店員」が怒鳴る

「一メートルです」。静かな紳士服の店の店内に大声が響いた。びっくりして女子店員の声の方を見た。客は、「ズボンを買うのでウエストを測つてくれ」と言つたのです。店内は、また静かになつた。

しばらくすると、その紳士服の店は閉店セールを一ヶ月も、二ヶ月も続け、本当に閉店した。もう三十年も前、小田急線の小田急相模原駅の駅前商店街であつた出来事です。客に対し、これほど失礼な店員のいる店がつぶれたのは当然です。店員の教育をおこたつた店長や社長の責任は

大きい。

今日、「通販で春夏用のズボンを買うのでLにしますか、LLにしますか?」「では、測ってみましょう」と言つて夫が荷造りの紐を持つて来て自分でウエストを測つた……「だいたい一メートルですね」「なんですつて、一メートルですつて」と、私の大声が台所に響いた。

### 「ママ」が怒鳴る

坂道を、かわいい女の子が母親と一緒に歩いて来ます。白い帽子をかぶっています。私は手を振つて「バイバイ」と言いました。女の子も歩きながらニコツと笑つて手を振るしぐさをしようとした、その瞬間、若いお母さんが大声で叱りつけた。「まっすぐ前を向いて歩きなさい」と。私は、縮み上がつて次の言葉が出なかつた。「かわいいですね」と母親に言おうとしていたのに。母親には余裕がありません。きつと、坂の上の病院で二時間も、三時間も待たされ、イライラしていたのでしよう。

昔、私が小さい娘たちを連れて歩いていると、「女の子お二人ですか。かわいいですね。いいですね」と、よく声をかけてもらったものです。それは、本当に嬉しいことでした。急いで帰宅して、夫に「ウチの子が、かわいいと言われた」と話し、二人で大喜びしたものです。

### 「幼児」が怒鳴る

新緑、気持ちのいい日曜日です。公園にカメラを持った若いママと、三輪車を持ったおじいさ

んと、小さい男の子が遊びに来た。

若いママは盛んにカメラのシャッターを切っています。おじいさんが持つて来た三輪車に男の子が乗りました。おじいさんはベンチに座って見えています。嬉しそうです。楽しい光景です。すると男の子が大声で叫んだ。「パパも来て。早く、遊ぼう!」。かわいい声は天高く響いた。「あれ?」。私は呆然と男の子の声を聞いた。

### 「低学年」に怒鳴る

二年生ぐらいの小学生の男の子が、背伸びをしてマーケットの棚から紙パックの牛乳を取り、「これ、何て読むの?」と言いながら母親のもとに走って行った。母親は、「買わないヨ」と怒鳴った。男の子は、すぐすと牛乳を棚に返した。買ってもらいたかったのでしょうか。

夫が、「飲んでみましょうか」と言つて、男の子が返した牛乳を買い物かごに入れた。「違うのにしたら」と言つたが、夫は私の言葉に耳を貸さなかつた。男の子が持った牛乳を買つて帰宅した。そして「あのお母さんは、漢字が読めなかつたのでしょう」と夫が言つた。夫は、内容量二百ミリリットルの牛乳を飲んだ。「商品名・丹那特濃乳、製造所・静岡県田方郡函南町丹那555」。

### 「男」が怒鳴る

日曜日、新築の家から怒鳴り声が聞えた。「うるせえな、昼飯なんか食わねえよ」。炎天下、両親と同居している四十代の男は、頭に手ぬぐいを巻いて庭の草むしりをしていた。母親が「お昼



にしたら」と言つたようだ。怒鳴つた言葉には、親に対するいたわりのかけらもない。同居する  
老いた両親には、もうあまり時間がない事を男は知る由もない。

### 「私」も怒鳴りたい

マーケットで、「こんな並べ方じゃあ、いけねえじゃあねえか、ここのカボチャは、あんたが  
やつたんだろ。もつと責任を持つてやつてよ」と言う若い男の店員の声が響いた。私は驚いてふ  
りかえつた。年配のパートのオバサンを叱りつけている。客の前で叱られた店員は、「ハイハイ、  
わかりました」と、愛想笑いをして手を動かしていた。

私は、傍に行つて「大声を出さないで。品物は開店前に並べておくのが常識よ。楽しい買い物  
が台無しだわ」と男の店員を怒鳴りつけたかった。

### 「料理研究家」が怒鳴る

テレビから年老いた料理研究家の怒鳴り声が聞こえてゾツとした。「先日話した事を家に帰つ  
てやつた人は、誰もいないの？ それでは、何もならないでしょう。何を聞いて帰つたの。こん  
なに大勢いるのに、誰もやらなかったなんて」。その後も、イライラ怒鳴りまくつた。よほど不  
機嫌だったのでしよう。大勢の若い女性たちはメモを取るノートを持っているが、誰もメモをし  
ていない。微動だにせず怒鳴る料理研究家を囲み、見つめているだけだ。これは異常な光景だ。

次に、料理が苦手という若い主婦の家で、根菜を茹でるだけの料理を紹介した。大きな圧力鍋

でジャガイモ、ニンジン、キャベツ、タマネギなどを茹でた。これを何人で食べるのだろうか。茹でて置けば、スープにもサラダにも使える。料理の基本だ。若い主婦は「きれいな色ですね」と言って持ち上げた。茹でればニンジンが色鮮やかになるのは当然です。

この料理研究家は父親が入院し食事がとれなくなると、毎日スープを作って持って行ったという「命のスープ」で有名になった。大勢の人がレシピを伝授してもらおうと集まった。「これと、あれを、こうして、ああして。最後の一滴が大切」、家で介護している人が作ろうとしても、準備に手間がかかり過ぎる。

結局、娘が家で作って持参したスープを飲んだ父親は亡くなった。テレビが取材していて料理を教えていてもイライラ怒鳴りまくっているのなら、家庭で、父親に接する時はどうだったのか。日常生活はどうだったのか。病院には栄養管理士がいる。病院の栄養管理士は、この状況をどう見ていただろうか。

◆「玄米スープ」は、玄米を全開を10とすると3の火加減で二十五分炒る。次に梅干と昆布で三十分煮る。これだけで一時間もかかる。

ある日、母が足柄上病院に入院した。八十八歳だった。胆石が、臍臓の入口で止まって黄疸を起こして、腰の後ろを押さえて痛がった。完全看護の病院だったが、配膳の人は食膳をベッドの足の方に置いて「お食事、ここに置きますね」と言った。点滴をしているので、自分ではとどかず、食べられない。全く食べていなくても配膳係は時間で処理した。最初は私が食べさせていた。一

時間も二時間もかかった。それを知った父が「俺が暇で家に居るのだから、食べさせに行つてやる」と、朝、昼、晩、行つてスプーンで一匙ずつ食べさせた。「食べないと死んでしまう」と一生懸命だった。雨の日も風の日も行つた。父も八十八歳、まだ元気だった。

結局、母は点滴を自分で抜いてしまうので、胆石除去の開腹手術の予約は、若い女性医師の方から断られ、胆石はどうなったか説明がないまま十日間で退院した。医師は首筋に点滴を打つた一時間も格闘したが、母はそれをすぐ抜いてしまった。医師は静かに怒っていた。「手術はできません」と言われた。点滴を抜いてしまい、ベッドを血で汚した母は家族の同意の上で介護用のグローブをさせられ、両手を縛られた。私は看護婦から、その都度呼ばれ、「ご家族の方から点滴を取らないように言ってください」と強い口調で言われた。私には、なすすべがなかった。いつ病院から呼ばれるかビクビクして過ごした。

退院すると、母は、ますます痴呆が進んでいた。本人も家族も疲れ切つた。入院は、もうこりこりだった。「だれか助けてー」家の中は真つ暗だった。

### 「図書館司書」が怒鳴る

神奈川県立図書館に調査に行つた。待ちに待つた三階の雑誌・新聞コーナーのリニューアルオープンの一日目。大勢の男の人が新聞、インターネットを使っていた。男の人ばかりだ。

男の職員に、からんでいる男の人がいた。「インターネットからコピーが取れない。前には取れた。縮小して四ページいっぺんに取りたい」「一ページずつだつたらできます」「前にできて、

今度できないのはおかしい。俺のやり方が悪いって言いてエのか」。男性職員に二時間も食いがり、からんだ結果、一枚ずつコピーして帰った。男は最後に「これで仕事がはかどります」と言った。悪い人では無いようだった。

一方、男性職員は、からまれて興奮し、「おかしい、変だなあ、これでコピーできるはずだがなあ。これも違う、あれも違う。どうなっているんだ。参ったな」と怒鳴り続けた。

新聞を読んでいる人、コンピューターの前の人、どの人も黙っていた。男の人たちは我慢強い。私も我慢した。みんな時間をやりくりして調べに来ているからだ。

帰宅して夫に話すと「からんでいた人は老人でしたか」「高齢の人ではなかったわ」「我々の世代より上の人は、コンピューターの扱いができない人が多い。その人は、お金がなかったのです。十円がもったいなかったのです」と言った。そういえば、「あ、十円がもうない」と呟いていた。かん高い声の若い職員は、もつと落ち着いて毅然とした態度で対処すべきでした。コンピューターの扱いを勉強すべきです。「僕が行って、やってあげたかった」と夫が言っ、図書館の話は終わった。

私は、同じ人が前にも来ていて、職員にからんでいるのを見た事があった。この時は、女性職員が階下のフロアーの職員を呼んで小声で対応していた。この時も、延々と二人の職員に食いがついていた。図書館には、いろいろな人が来る。

## 念ずれば

「念ずれば通ず」という言葉を頻繁に使う人がいる。「どんなに困難かと思われることも、一心に思えば何とかなる」というのだ。日本は仏教の国なので、この言葉を事ある毎に口にして喜びや悲しみを分かち合うのは、わからない事もない。

私は宗教を持っていないから、「念ずれば」と聞くと、奇妙な感じを受ける。事の成り行きを自分の都合のいいように解釈し、喜んだり悲しんだりするのは馬鹿げている。念じたからといって事態は何も変わらない。変わるはずがない。

## 謎の映画

昭和二十九年（一九五四年）作品、東宝の大ヒット作『ゴジラ』を観た。音響を担当した三繩一郎氏がインタビューに答えた。なんと九十六歳、背広を着て歩いて現われた。ゴジラの「ドスン、ドスン」という足音、「ガオー、ガオー」という鳴き声は、この人が若い頃作った。

ゴジラの鳴き声は、松ヤニをつけた革手袋でコントラバスの弦をこすった音色をテープに録音し、これを手動で速度を調整しながらゆっくり逆回転再生した音。これは製作時に、音楽を担当した作曲家の伊福部昭が作曲したもの。楽譜に書き込まれている。また後の東宝映画、円谷作成の怪獣の声も、この手法を使用した。ゴムタイヤやブリキ、ヴァイオリンの弓を使ったりした合

成音。これにより、怪獣の足音、鳴き声は決定的となった。

「ジャジャジャン、ジャジャジャン」と、どこまでも繰り返される不気味な伊福部の音楽もすばらしい。特殊技術は円谷英二、出演者は宝田明・河内桃子ほか。

伊福部昭の言葉が残っている。「兄が二人、二つずつ違いでおりまして。一番上の宗夫は肺に病気を抱えていて工学博士で、もうだいぶ前に亡くなりました。二番目の勲は戦争中に羽田の夜光塗料研究所というところで夜光塗料の研究をやりすぎて、血を吐いて死んじゃいました。夜光塗料は放射性物質をたくさん使うものですから、かなり被爆していたと思うんですけれど。『交響譚詩』というのは、その兄貴の死に方が、あんまりかわいそうだから、というので追悼のつもりで献呈したのです」（生誕一〇〇年ゴジラ誕生六十年記念 文藝別冊『伊福部昭 ゴジラの守護神・日本作曲界の巨匠』（河出書房新社）による）。

DVDの『ゴジラ』を観ていて小学生の頃の巡回映画を思い出した。映画鑑賞会は一年に二回ほどあった。みんなが楽しみにしていた映画会は、私にとって恐怖の日だった。映画鑑賞会は高学年と低学年に分かれてあった。私は体が小さかったので小さい順に座ると前列だった。映画には必ず汽車が遠くから走って来るシーンがあった。私に向かつて走って来た。ぐんぐん近づいた汽車は、「ヒエーッー」私の上を通過して行った。「こ、恐いー」。これだから映画は嫌いだった。

ある時、映画が終わりに近付くとキスシーンがあった。主役は白い船員服を着たハンサムな男で、女性は知的な美しい女優だった。体育館のあちこちで「キヤー」という声があった。私は何の

事かわからず、その悲鳴に驚いた。先生方は慌てた。上映前に下見をしていなかったのだと、大人になってから思ったが、見せてしまったので後の祭りだった。内容は被爆した船の事だったように思うが、ほとんど覚えていない。ただただキスシーンと小学生の悲鳴を覚えているだけだ。

今日、夫にこの話をする、「それだけではあまりにも情報が少なすぎて、映画のタイトルはわかりませんね。当時は原爆や水爆、核実験といった映画が次々作られたから」とのことでした。いったいこの映画のタイトルは何だったのだろうか。

### 単純な疑問

単純な疑問は星の数ほどある。

#### 「音楽の教科書」単純な疑問

今や音楽は多様化している。クラシック、ジャズ、フォークソング、童謡や唱歌、ポップスなどが社会にあふれている。

学生の時、国立音楽大学教授に質問をした。「なぜ、音楽の教科書は薄いのですか」、すると教授は、「いろいろな理由があります。ひと口では言えません」とのことだった。教授は音楽の教科書の執筆者だった。

今日、夫に同じ質問をした。すると、「他の教科、国語や算数や理科に比べると音楽の単位数

が少ないからです」と即答だった。「なるほど」。私は納得した。夫は高校の理科の教科書の執筆をしている。「その教授は教科書の事を良くわかっているなかつたのです」とも言った。

そういえば、音楽の教科書と同じように単位数の少ない美術の教科書は、同じように薄かつた。玉川学園の創立者、小原國芳氏は、『愛吟集』の序文（昭和三十八年七月）の中で、「教科書の標準曲数は一年にわずか三十数曲ですが、それだけしか与えられない子供たちはかわいそうです。その満たされない心が流行歌を追うという浅ましい現象になるのです。玉川学園で流行歌がきかれないのは、それが禁じられているのではありません。それに代るより楽しい、より美しい、より高い、より深いものがあるからです」と書いています。「浅ましい現象」は言いすぎる気がありますが、「青少年に歌を、歌から明るいまなざしと、ほがらかな笑顔が生まれる」というのは正しい。

「歌は人生に潤いと励ましを与えてくれます。人生に歌がなかつたら、どんなにか、それは殺風景なものでありましょう」（小原國芳の言葉）。

### 「老人ホーム」単純な疑問

なぜ、老人ホームには、これほど多額の入所金を支払わなければ入れないのでしょう。自己負担金が安いといわれる特別養護老人ホームでは満室の施設が多く、何年待っても順番が回って来ない。入所期限を定められることもある。これでは、「介護事業で金儲けをしている。とんでもない事だ」と言われても弁解の余地が無い。現在の老人ホームの料金は一般の人が利用するには



高すぎる。気軽に利用できない。

入居できない人がいる一方で、入居金を支払って介護を受けている人もいる。老人ホームでの生活を楽しんでいる人がいる。この差は、貯蓄にあるようだ。若い頃は、老後を考えないものではない。しかし、親の介護が始まってから自分の老後を考えるのでは遅い。

### 「訪問介護」単純な疑問

訪問介護（ホームヘルプ・サービス）の人が、一人住まいの脳梗塞で痴呆の人の世話をする。家の掃除をしている時、部屋に落ちていた消しゴムをポケットに入れて持ち帰るということはないのだろうか。

たとえば、ホームヘルパーは家を訪問し、入浴・排泄・食事などの身体介護や、調理・洗濯などの生活援助を行ってくれる。一人に一人のホームヘルパーが派遣される。家族が同居している場合があるが、普通は一人住まいが多い。自己負担のサービス費用は目を疑う料金だ。簡単に利用できる料金ではない。すでに利用している人からの苦情はないのだろうか。

昔、テレビで歌手の八代亜紀が女子刑務所に歌の慰問に来るドラマを観たことがある。受刑者の中に盗みの常習犯がいた。ホームヘルパーとして働きに行った先々の家で盗みを働く。刑務所から出ると、また盗む。「また、あんたかね」「ついつい、やってしまう。罪は軽いから、すぐ出れる」「出たって、また来るんじゃないか。わかったか」と言う台詞があった。これはドラマだが、実際にはどうだろう。ニュースにならないのは、なぜだろう。

介護保険制度ができて久しい。介護保険制度では要介護認定が必要。被保険者が介護を要する状態であることを保険者である市町村が認定するものだ。介護福祉課に要介護認定の申請をする時、心身の状況を調べるために本人と家族への聞き取り調査がある。

私は九十歳になる父と母、二人の介護をしていた。認定調査は研修を受けた町の知り合いの同世代の女性が来た。私はこの制度を勉強不足だったため、父や母の事、家庭の事情を全て話してしまった。もちろん、母が近所の主婦に、お金を貸し続けてしまった事、その主婦が玄関で土下座をした事も。夫が、「自分だけで抱え込まないで、町の人にも知っておいてもらった方がいい」と言ったからだ。しかし、認定調査員は「わかりました」と言っただけだった。

次の回に来た別の調査員に、「前回お話して、おわかりと思いますが」と言っただが、これらの事は伝わっていなかった。最初の人は、私から聞いた話を介護認定審査会（認定調査の結果と医師の意見書をもとに、保健、医療、福祉の専門家が審査する）に報告していなかった。私は、父母の過去や家の事情を他人に全て話した事を後悔した。そもそも介護保険制度は、その老人の現在の要介護度を審査するものだ。「立てるか」「手が動くか」「話せるか」などを見るものだ。しかし、「金銭の管理」の項目もある。話さないわけにはいかなかった。

「話したけれど、全然取り合ってもらえなかった」と夫に話すと、「その審査員は形式だけで親身になっていない。研修不足、おろかだね」と言った。

何年か後、最初に認定調査に来た女性が来た。「金銭管理の項目で土下座女の事は前にもお話ししましたが、介護認定審査会に報告されましたか」と訊ねた。すると「まだ、お金を返してもらっ

ていないのですか」と平然と言って帰って行った。私は介護の老人を二人抱えて泣いた。目の前は真つ暗だった。

介護保険制度を利用したいと思う時は、介護を必要とする高齢者を抱えて、本当に困った時だ。相談や手続きに向く時間など一刻もない。「利用できるまで面倒な手続きがあり、三ヶ月後によくやく介護サービスの利用が始まったが、脳梗塞の母親は、すぐに亡くなった」と漏らす人があった。現実を知らない人は話を聞いて、「何それ、そんなに手続きに時間がかかるの」と驚いていた。さらに、この制度は期限付きで、更新する時は、また介護福祉課に要介護認定の申請をし、面接が必要となる。要介護度が軽くなっている場合もあるからだ。しかし、ほとんどは前回より重くなっている。立ち上げられた人が、歩けなくなっていたり、寝たきりになっていたり。だから新たな面接が必要となるのだ。

このように、他人が家の中に入るのには難しい問題がある。介護保険制度は、当事者になってみないとわからない事かも知れない。

### 「入院手続き」単純な疑問

「腸捻転」という言葉が頭にしみついている。ある時、病院の待合室で、入院手続きの書類を二人の女の人が書いていた。二人は姉妹のようで、しきりに「腸捻転」「緊急入院」「保証人」と言い、「わからないわねえ」「ここは書けないわ」「知らない」「どうしようか」と話し合っていた。どうやら身内の誰かが腸捻転で緊急入院し、その書類を書いているようだ。

入院手続きには、書類に身元引受人である保証人と、入院費の連帯保証人の署名・捺印が必要。なれない書類を書くのには、時間がかかる。私は高齢で危篤状態の父と母が入院するたびに書類を何度も書いた。気が急いでいるので書き損じたりした。入院の準備もあるし、自分の家族の生活もある。高齢で独り暮らしの患者の場合は、どうするのだろうか。もっと簡単な方法はないのだろうか。時々、「腸捻転」という言葉が思い出される。腸捻転の患者は助かっただろうか。

## 「万引き」単純な疑問

高齢者の万引きが増えている。若者の手本となるはずの高齢者が、どうしたことか。私は、高齢者が万引きをする現場に遭遇した事がある。

一件目は、小田急線の洪沢駅のマーケットで花を見ていた。一束三百円から五百円。どこでも同じだなど思っていると、腰の曲がった白髪頭のおばあさんが、いきなり一束手に取ると、隣りのパン屋に入って行った。そして、消えた。お金を支払っていない。「もしもし」と、声をかけようとして、やめた。年寄りを捕まえてもしかたがない。かわいそうだ。私は、その場に立ちつくした。今見たものは何だったのか。

おばあさんは、おじいさんの墓に花を持って行ったのだろうか。盗んだ物を供えて嬉しかっただろうか。声をかけて警察に引き渡していたら、どうなっていただろうか。いつまでも忘れられないでいる。

二件目は、小田原駅前の土産物商店街にあった丸井駅前店が薬局になっていた。駅に向かつて

ブラブラ歩いてみると、その薬局から背の高いほっそりとした高齢の男が出て来た。それと同時に、店から若い店員が出て来て、男の腕をねじ上げた。男は、持っていたビニール袋を路上にポトリと落とす。その瞬間、パトロールカーが急ブレーキをかけて横付けした。中から警察官が二人飛び出して来た。私の目の前で男に手錠をかけた。本物の手錠を初めて見た。男はパトロールカーの後部座席に入れられた。両側に二人の警察官が乗った。すぐ連行された。店員は、路上に落ちていたビニール袋を拾って店に引き返した。刑事ドラマのワンシーンのような一瞬の出来事だった。私が、もう少し速く歩いていたら男に当たっていたかもしれない。男は凶器を持っていて、私は人質になっていたかもしれない。パトロールカーを見送って、私は、その場に立ちつくした。今見たものは何だったのか。

一瞬の出来事だったので、犯人の顔は覚えていない。その場は、すぐ何事もなかったかのように平凡な日常がもどった。

三件目は、真鶴の童謡の会の帰り、新しくできた薬局の前を通ると、店頭のサンダルのカゴから一足手に取り、自分が今履いているサンダルと履き替えている老人がいた。そのまま履いて私の目の前を歩き出した。「あれ？ お金を払っていないよ」。老人は、慌てたので値札を取らないままだった。歩くたびにその値札がパタンパタンと大きく響いた。そのまま次の路地に、消えた。昼の十二時なので誰も見ていなかった。私はリュックを背負って大荷物を抱えていたので、追いつけなかった。警察に連絡したら、「これは、俺のサンダルだ」と主張しただろうか。今見たものは何だったのか。

いずれの場合も、少年の万引きを注意すべき高齢者の犯行だ。貧しいは悲しい。バブルの時代、一生懸命働き、老後に備えて貯蓄をしなかったのだろうか。今まで、どのような生活をしていただろう。わずかな金額の万引きだから、高齢者だから、と許されることではない。私は怒っている。

### 「遺族」単純な疑問

「今後、このような事がないようにしていただきたいものです」と、通り魔に殺害された人の遺族が、いじめで息子が自殺をした遺族が、交通事故の被害者の遺族が、強盗に殺害された人の遺族が、エレベーター事故で息子を亡くした遺族が言う。まるで他人事だ。なぜだろう。悔しい胸の内を話せばいいのに。それとも「死んでしまった者は、もどって来ないのだから、しかたがない」「加害者には将来があるのだから考えてあげなさい」と肩をたたく者がいるのでしょうか。大阪市立桜宮高校に通っていた十七歳の高校二年の男子生徒が、平成二十四年（二〇一二年）十二月二十三日早朝、自宅の部屋で、制服のネクタイで首をつった状態で、家族に発見された。彼は、男子バスケットボール部キャプテンで、顧問教諭から体罰を受けていた。負けるたびに責任を取らされ、殴られ続けて自殺した。顧問の指導は「熱血教師」として有名で、生徒を殴っている事は以前から知られていた。

平成二十五年一月九日、生徒の父親は読売新聞社の記者の取材に対して「コメントは、差し控えてさせていただきます。今は何も話したくないです」と言葉少なに語った。父親としては、それでい

いのだろうか。もう、この父親に記者が取材する事はないだろう。父親はラストチャンスを逃した。息子が助けを求めていた父親は頼りにならなかった。息子の殴られた顔を見て、ありがたい指導だとも思ったのだろうか。最後の日、父親は体罰をした教諭と同じ言葉を息子にかけてしまった可能性がある。男子生徒は進む道を見失った。

テレビでは、いじめの境遇に合っている人に向けて評論家が意見を言う。「本当に死にたいと思うような学校だったら、行く必要はない」とか、「いじめがあるから学校に行きたくないと言えは十分、そこから可能性はいくらでもあるからね」と。それほど強い意志があれば自殺はしないだろう。評論家は全くわかっていない。

### 「体罰」単純な疑問

小田原市でも平成二十五年二月一日、中学校の五十代の男子教諭が、二年生の男子生徒十六人に一回ずつ平手打ちする体罰をした事が公表された。

神奈川新聞によると、この教諭が担当する六校時目の開始時間に遅れて来た生徒たちに早く教室に入るよう指導した際、「うるさい」「死ぬ」「ハゲ」「バカ」など四度に渡って複数の生徒が言い返したため廊下に出るよう求めた。生徒を廊下に正座させて発言者に名乗り出るよう促したが、誰も答えなかったことから全員をたたいた。教諭は授業終了後に校長に報告、翌日、生徒と保護者に陳謝した。

まず、「正座」そして「たたく」体罰はいけない。そこからは何も得られるものがない。他に

教育的に効果のある指導はなかったのか。

五校時の体育の終了が数分遅れたため、生徒たちが教室に戻るのも遅くなった。しかし、授業に遅れなかった生徒もいる。この十六人はもつと急げば間に合ったのではないだろうか。時間にルーズな生徒を許していたらきりがない。授業が成り立たない。教諭からすれば、あらかじめ授業の時間計画（起承転結）がある。これは生徒には理解されていない。説明する必要がない事だからだ。

さて、この事件で全く問題にされていない事がある。先生に対して「うるさい」「死ね」「ハゲ」「バカ」など四度に渡って複数の生徒が言い返したという。私が生徒だった頃は、先生に対してこのような事を言う事はなかった。私は驚いた。昔は、このような生徒は退学や停学の厳しい処分がされた。今回はどうだろう。生徒は先生に対する暴言を認めて謝っただろうか。

神奈川新聞には、この教諭は「発言に責任を持ってほしかった。体罰事件が起きている中で申し訳ない」と釈明しているという。

「生徒指導は、一人の先生が抱え込まず、一致協力する体制を作り、何かあったら複数で対処するようにすべきだ。特に問題の多い学校では全員の先生の協力が不可欠」と夫が言った。そう話す夫は高校教師の顔になっていた。

## 「死刑」単純な疑問

平成二十五年（二〇一三年）二月二十一日、三件の事件の死刑が執行された。今回、刑が執行



されたのは、平成十四年（二〇〇二年）に名古屋市のスナック店主殺害事件の死刑囚、平成十六年（二〇〇四年）に奈良県で女兒（小学校一年生・当時七歳）を誘拐し殺害した死刑囚、平成二十年（二〇〇八年）に茨城県のJR常磐線荒川沖駅などで九人を殺傷した死刑囚だ。いずれも、社会を震撼させた。何も知らずに殺されてしまった人は、どれほど無念だった事だろう。

犯人には弁護士がついた。通り魔事件の弁護士によると、「申し訳なかった」と言う言葉を引き出せなかったとの事だった。それで終わらせてしまつてよかつたのか。男は死刑になりたくて犯行に及んだ。一貫して死刑を望んでいた。

犯人が何と言つても、殺されてしまった人は、もどつて来ない。死刑が執行され、また三人の人が死んで逝つた。「命」、これでいいのか。こんな事の繰り返しでいいのか。死刑制度についての議論の場がないと、多くの国民が制度の内実を知らないまま執行が続く事になる。死刑執行は、凶悪犯罪の抑止が目的の一つだという事を、みんなで考えたい。しかし、犯罪は無くなる事がなければかりか新しい手口の犯罪が多発している。これでいいわけがない。

テレビの路上インタビューに対し、私と同年代の主婦が「あの世があるならば、出会つた時、謝つてほしい」と言つていたが、私はテレビの前で、「二度と近寄らないで」と叫んだ。人の意見には、これほど差がある。

### 「無期懲役」単純な疑問

千葉県松戸市で平成二十一年（二〇〇九年）、千葉大学の女子大学生（当時二十一歳）が殺害

された事件で、東京高裁は平成二十五年（二〇一三年）十月八日、一審の裁判員裁判の死刑判決を破棄し、被告を無期懲役とした。

計画性が無く、被害者が一人の強盗殺人事件では過去、死刑適用がなかった先例に沿った判断。一審の判決は、強盗殺人罪などに問われた被告が七年間服役して出所後、短期間のうちに女子大学生殺害の他にも、強盗致傷や強盗強姦など被害者が計五人に上る重大事件を繰り返した点を重視した。

しかし、高裁判決は、死刑の対象とはならない、他の事件が示す被告の危険性について、「先例に反して死刑を選択するまでの合理的な理由にはならない」と判断した。

無期懲役の場合、刑務所の中で最低の衣食住が保障される。その生活費は国民の税金から、つまり私が支払うことになる。被告の更正のためだ。では、路上生活者（ホームレス）と比べたらどうか。刑務所で暮らす方が、ずっと好い生活だとすると、極端な話、一人殺して無期懲役で暮らす方が好い事になってしまう。それでいいわけがない。そのことを、死刑廃止論の人は、わかっていない。

では、女子大生は、この男に殺されてもよかつたのか。未来に夢があつたでしょう。親は、「納得がいかない」と声明を出した。女子大生の命が、あまりにも軽くみられている。

### 「裁判官国民審査」単純な疑問

最高裁判所裁判官国民審査は、最高裁判所裁判官を罷免するかどうかを国民が審査する制度だ。

最高裁判所裁判官は、任命後初めて行われる衆議院議員総選挙の際に国民審査を受け、その後は審査から十年を経過した後に行われる衆議院総選挙の際に再審査を受け、その後も同様とすると定められている（日本国憲法第七十九条第二項）。

しかし、司法に対する国民の関心が低い上、国民審査は必ず衆議院議員総選挙と同時に実施することと定められていて、新聞社やテレビ局は衆議院議員総選挙のニュースばかりを大きく報道して、国民審査の扱いは極めて小さいため、国民審査は国民からほとんど注目されることはない。また、最高裁判所裁判官の定年は七十歳であるのに対し、最高裁判所裁判官に任命される者はほとんどが六十歳以上なので、日本国憲法第七十九条第二項の条件を満たして実際に国民審査の再審査を受けた最高裁判所裁判官は過去にわずか六人で、再審査を二度受けた裁判官は一人もおらず、一九六三年を最後に国民審査の再審査は一度も行われていない。

選挙に行った人は、どのようにして「マル〇」や「バツ×」を書いて投票箱に入れているのでしょうか。私の場合、母から「裁判官は国の手先だから全員×にする」と教えられたとおり全員に×を付けていた。それで選挙は終わる。

最近、その裁判官がどのような事件にかかわり、どのような裁きをしたか、知らずに投票するのはいけないのではないかと思うようになった。投票する人は、その裁判官の事をよく承知しているのだろうか。新聞を見ても、事件には関心があるが裁判官の名前を覚えることはない。選挙の前に新聞社は裁判官がどのような人か、履歴、職歴などを公表してほしいものです。実際にはマスコミで報道されているのだろうが、私はそれを知らない。他の人も同じだろう。選挙に行っ

て、どうしたらいいのかわからない人は、きつと「○」か、「白紙」で出すのだろう。

オランダ人ジャーナリストのカレル・ヴァン・ウォルフレン氏は、日本の社会に関する論説の中で、国民審査の制度について「この直接民主主義は純粹に儀式的な、そえ物」と表現している。最高裁判所裁判官は人の命を裁く。国民は関心を持たなければいけない。国民審査は「儀式的な、そえ物」であつてはならない。ふざけた投票をしてはいけない。

### 「選挙」単純な疑問

私は四月生まれ。成人した年の四月に、すぐ選挙があつた。大学二年生だつた。選挙に行くところ投票所には選挙管理委員の人以外、だれもいなかった。私だけが投票をした。白髪のおばあさんが椅子に座つて私を見張つていた。静寂の中に、鉛筆で候補者の名前を書く音が大きく響いた。それで選挙は終わった。おばあさんは、椅子に座つたまま動かなかつた。次回からは選挙があつても行かなかつた。大学四年を卒業しても、就職をしても。その間、町長選挙は立候補者が一人のため無投票が続いた。

結婚をすると、高校教師の夫が「選挙は国民の義務です。投票権を無駄にしないように」と言うので選挙に行くようになった。しかし、町議会議員選挙が無投票になった時があつた。立候補者の中には、「こんな事もあるものだね、立候補してよかつた」と言う人があつた。その議員は次の選挙も、その次の選挙でも落選した。

また、町議会議員補欠選挙では、「立候補者が、チラシを置いて行きました」「誰かしら」「さあ」

と夫が言うので、「どれどれ」とチラシの写真をみると、「この人、知っている。近所のおじさんだ。背広姿だったからわからなかった」という選挙になった。近所のおじさんが当選して町会議員になった。

今回（平成二十七年四月）の神奈川県議会議員選挙も、私の選挙区（小田原・足柄上地区 定員二人）では無投票になった。神奈川県議会議員に若い人が誰も立候補しないと、非常に情けない事です。「若者は、どうした」と言いたい。無投票で当選した人が今後四年間、どのような課題に取り組むのか知りたいものです。

選挙権年齢を「十八歳以上」に引き下げる改正公選法が、平成二十七年（二〇一五年）六月十七日の参院本会議で全会一致により可決、成立した。反対の議員はゼロ。では、高校生の政治活動は、立候補は、どうなるのか。少年法の対象年齢はどうなるのか。タバコや酒は。重要な事が先送りされてしまった。

集団的自衛権の行使を可能にする安全保障関連法が平成二十七年九月十九日未明、賛成多数で可決、成立した。閣議決定が先行し、国会が遅れて次々と多数決で法案を成立させる。当然だが人数の多い政党が有利だ。国民は、それでいいのか。こうなると、自分の意見を反映する人を選ぶ選挙は重要な意味を持つ。選挙権を放棄することはできない。

### 「義務教育」単純な疑問

「子どもは小学校（六年間）、中学校（三年間）の義務教育だけでよい」という考えの母親に出会っ

た。私は、子どもに能力があれば高校、大学、大学院で学ぶべきだと思っている。東京大学の大学院は社会人枠を設けている。米大リーグで活躍した元プロ野球の桑田真澄投手は、平成二十六年四月から東京大学の大学院研究生として学んでいる。

よく考えると、その母親が言うように義務教育を受ければ普通の生活はできる。小学校、中学校では、読み書き計算を教える。短歌や俳句の作り方、英語の話し方、マイナスの計算までできるようになる。義務教育が終了すれば生活に困らない。しかし、「義務教育だけでよい」という考え方には納得できないものがある。

では、義務教育以上の教育を受けるとどうなるでしょうか。当然、知識を得て、自分の生活、両親の生活や考えを批判するようになる。母親が宗教を持っていて、自分も生れた時からその宗教の洗礼を受けたとしたらどうでしょうか。高度な教育を受ければ、宗教のウソと向き合う事になる。

もし、「子どもは小学校、中学校の義務教育だけでよい」という考えが、自分の入会した宗教に疑問を持たせないようにするためだとしたらどうでしょうか。それに気がついた時、子どもは深い悩みの底をさ迷う事になる。悩んだ末、自殺をしてしまうかもしれない。そんな親子関係を作る宗教は、許すことができない。

外国ではどうだろう。南米アルゼンチンの教育基本法では、教育は「国家の最優先課題」と位置づけられ、義務教育は幼稚園の最後の一年と、小中学校十二年の計十三年になっている。小学・中学の区分は、州によって「七年・五年」や「六年・六年」がある。一般的に公立学校の学費は

無料だが、私立は有料。小学校から留年の制度が設けられている。

日系移民が多いブエノスアイレスの私立学校では日本語教育を必修化している学校が人気を呼んでいる。日本とアルゼンチンの架け橋となる子どもが育つといいです。私が主宰している童謡の会で紹介すると、「このアルゼンチンの教育制度は、すばらしいですね」と言う声があった。

### 「戦争」単純な疑問

なぜ、戦争で死んだ人々は「戦争だから、しかたがなかった」と片付けられてしまうのだろう。北方で、南方で、沖繩戦で、本土爆撃で何千何万の人が死んだ。

原爆投下で死んで逝った人々は「戦争終結には、しかたがなかった」と言われ、それでいいのか。アメリカは原爆投下を正当化しようとしているが、一般人を巻き込んだ原爆投下は非人道的な事だった。日本は世界で唯一の被爆国だ。広島（昭和二十年八月六日）と長崎（昭和二十年八月九日）に落とされた二発の原爆は、ささやかに暮らす人々の命を奪った。ひどい事だ。日本が原爆反対を表明しなくて、他に誰がするのか。

今、沈黙していた原爆体験を語ろうとする人が現われている。語っている体験者に「死に損ない！」と罵声を浴びせる修学旅行の高校生がいたという。これは学校側の教師に責任がある。生徒は事前の勉強がたりなかった。被爆体験者がどんなに傷ついたか。

中学校で原爆体験を語った人が、最後に原発反対の意見でまとめようとした時、校長が話を中断させたという。被爆者が原発反対なのは当然でしょう。原発賛成なら、おかしい事です。人に

はいろいろな考え方があつた。校長は原發賛成なら、自ら賛成意見を生徒に語つてもいいが、それでは被爆者を、わざわざ学校に招いた意味が無い。被爆者は一般人で、八十・九十歳の高齢者だ。話を中断された人の気持ちは、いかばかりか。「もう語れない」と言つたのは当然でしょう。生徒に戦争の残酷さ、当時の政府の愚かさを伝える事ができなかった。校長には語りを中断した事への反省はなかつた。生徒は、なぜ校長が被爆者の話を中断したのかわからなかつたと思う。

十代、二十代の若者が特攻で死んで逝つた。空では零戦、海では人間魚雷回天が特攻兵器として使われた。「神風特別攻撃隊は、最後の手段で、しかたがなかつた」と言われ、それでいいのか。日本人々が戦時中、平気で口にした「立派に死んでこい」「お国のために死んでまいります」とは、一体なんだつたのか。これほど野蛮な言葉はない。教育の成果が、これだ。

現場で特攻者を選んでいた上官は、「命令だつたから、しかたがなかつた」と証言した。「十機出撃して十機敵に命中」の報告は嘘で、実際には、ほとんど命中していなかつた。しかし、「運転が未熟で敵艦に当たらず、海に落ちてしまいました」「燃料不足で敵軍まで行き着きませんでした」とは報告されず、戦死報告は勝利報告ばかりとなつた。失敗は伏せられ、戦況は悪化し、指導部内では負けがわかつていた。それでも特攻を続けたのは、敵に一撃でも多くダメージを与える事で、終結の時の条件を有利にしたかつたためだつたという。若者の命は簡単に使われた。戦争は愚かだつた。

昭和二十年八月十五日は、「終戦記念日」と呼ばれ、始まつた戦争が終わつたというだけで、無謀な戦争をして日本は敗れたという敗戦の意識が薄い。敗戦を知つた国民はショックだつた



が、みんな戦争が終わった事を喜んだ。一般人は戦争に勝っても負けても戦争が終わる事を望んでいたからだ。それが何より証拠には、復興は目覚ましい勢いで進み、昭和二十二年の長崎では海の中に神輿を入れ、立ち泳ぎをしながら字を書く奉納も復活していた。NHKの『おらタモリ』のタモリさんがその映像を観て「敗戦からまだ二年だよ、こんなに浮かれていいの?」と言った。昭和二十五年になると、戦争はまるでなかったかのように復興し、続いてバブルの時代が来る。戦争を体験した人が、やっと話すようになっていく。みんな高齡なので、うまく話せない。結局「二度と戦争をしてはいけない」「穏やかな平和な世の中を望む」と、まとめる。それでいいのだろうか。

平成二十七年、七十九歳になった指揮者の小澤征爾さんが言った。

「僕は音楽家です。だから政治や民族、戦争の問題にはなるべく首を突っ込まないようにしてきた。最近、ちよつと不安に思う事がある。戦争を経験した人が次々といなくなってきた。悲惨さ、残酷さを身を持って体験し、自分の言葉で語れる人が、ここ十年余りで本当に少なくなってきた。ベトナム戦争を体験したアメリカやコソボ紛争などがあつたヨーロッパでは、戦争体験が日本ほど風化していないんだ。だから、僕のような戦争体験者が、その経験を語り継いでいかないといけないと思つている」と。

ところが、「現在の憲法を廃止し、自衛隊を防衛軍として盛り込んだ新しい憲法を作り、強い日本にして行くようではありませんか」と演説する総理大臣が人気だ。過去の戦争からいったい何

を学んだのだろうか。

昭和四十九年二月二十日、フィリピンのルバング島に潜んでいた元陸軍少尉、小野田寛郎さんが発見された。小野田さんは、昭和十七年に応召。陸軍中野学校二俣分校（静岡県）で、遊撃戦の訓練を受けた後、昭和十九年末、ルバング島に派遣された。敵を後方からかく乱するのが小野田さんの任務だった。

それから約三十年もの間、対米戦争は続いていると信じ込んでいた。「大東亜共栄圏を完成させるためには百年ぐらい戦争を続けなければならない」と、中野学校で教えられていたことが大きく影響していた。敗戦は信じず、ひたすら次の命令を待っていた。

昭和四十九年三月九日、元上官がルバングを訪れ、小野田さんに直接、任務解除の命令を告げた。「ご苦労でした。ゆっくりしなさい」と。その三日後、帰国した。「一番つらかった事は、戦友が次々亡くなった事です。嬉しかった事は、二十六年間一度もありませんでした。私の戦後は、これから始まります」と言った小野田さんは、現在（平成二十五年）九十歳。自分たちは何のために戦ったのかと、失望は大きく、空白は埋まっていない。

一方、小野田さんを探すために島を訪れた冒険家の青年、鈴木紀夫さんは、小野田さん救出に貢献した後、今度は昭和三十二年に雪男探しのためにヒマラヤに入り、遭難死した。新聞には、日本に帰国した小野田さんが敬礼する隣りで満面の笑みを見せる鈴木さんの姿が写っている。鈴木さんの訃報を知った小野田さんは号泣した事だろう。

いじめや自殺をする子どもたちに心を痛めていた小野田さんは、平成二十六年一月十六日逝去。享年九十一歳。私たちに、再び軍隊を作ってはいけないという教訓を残した。

私も言う。私は童謡の会を主宰している。「今日は文部省唱歌の『ふじの山』を歌います。神奈川県の松田町は日本一富士山が美しく見える町としてテレビで紹介されました。「かみなりさまを下にきく」「かすみのすそをとほくひく」最初に朗読してから歌うと意味がわかります。「ふじは日本一の山」ここが、いいですね」。

その後で、「戦後の新しい音楽教科書、昭和二十二年版の『二年生のおんがく』（文部省）には掲載されていません。楽しい音楽を目指した文部省の姿勢がうかがえます。靖国神社を見学に行った時、あちらでもこちらでも『ふじの山』を歌っているグループがありました。この歌は、このような場所で歌うものかと思いましたが、びっくりして帰宅し、しばらくは『ふじの山』が歌えませんでした」と言った。しかし、この話し方では具体性に欠けるので、「何の事だろう？」と、童謡の会員は思ったに違いない。

私は、大勢の人の前で話ができる時、その立場にある時、自分の主張を言うように心がけている。理解されてもされなくても、とにかく話すようにしている。私は今まで出会った音楽家から、すばらしい音楽を聴かせてもらったり、ピアノや歌やヴァイオリンなどの技術の教えを受けた事はあっても、自分の主張を言う人に出会った事がない。音楽をする人と政治や経済の話をしたことがない。ある音楽家から「私には難しい事はわかりません」と言われた事があった。また、文

通をしていたピアノリスト館野泉さんに、「コンサートの合い間のお話の時に、チェルノブイリの子どもたちの現状を話してください」と書くと、返事が来なくなつた。これは、館野さんが病気で左手のピアノリストになる前の出来事です。

平成十四年、東京都江東区にオープンした東京大空襲・戦災資料センター館長に就任した作家の早乙女勝元さんは言う「平和は歩いて来ない。戦争を知っていたら伝えよう、知らなかったら学ぼう」と。事実を知り、世界のありようを考えよう。

## 悲劇の風化

平成七年（一九九五年）九月六日の深夜、神奈川県警の警察官が二人わが家を訪ねて来た。玄関でピカピカの警察手帳を見せ、「御主人は、おいですか」と言った。初めて本物の警察手帳を見た。父母、私と子どもたちが言葉を失い驚いている所に、庭の実験棟・通称パパハウスから夫がもどって来た。突然後ろから大男が現われたので二人の警官はビックリしていた。

客間に入ると、「お茶はいりません」と言い、夫と警官は小声で話し込んだ。私たちは、隣りのおばあちゃん部の部屋で聞き耳を立てたが話は聞きとれなかった。しばらくすると、「夜分申し訳ございませんでした」と、丁寧に挨拶すると帰って行った。それで、この件は終わった。

警官が来た理由は、重大な事だった。オウム真理教がまだほとんど知られていなかった平成元年（一九八九年）十一月四日未明、その反社会性に気づいて信者脱会支援などに取り組んでいた

坂本堤弁護士（当時三十三歳）が、妻の都子さとこさん（当時二十九歳）、長男の龍彦ちゃん（当時一歳）と共に横浜市磯子区の自宅アパートで殺害された。アパートのドアはカギがしてなくて、室内にオウム真理教のバッジが落ちていたと報道された。

松本サリン事件（一九九四年）、地下鉄サリン事件（一九九五年）などを経て五年十ヶ月後の一九九五年九月六日、坂本さんが新潟県上越市の大毛おおげなげ無山で、都子さんは富山県魚津市の僧ヶ岳で遺体で発見された。龍彦ちゃんは四日後に長野県大町市の大町温泉郷近くの湿地帯で見つかった。生きていれば二十七歳になっている。

確定判決によると、一家殺害は坂本さんの活動を排除するため教祖の松本智津夫死刑囚（教祖名・麻原彰晃）が指示し、教団幹部ら六人が実行した。後に刺殺された一人を除く五人全員の死刑判決が確定している。今年（平成二十七年・二〇一五年）は、坂本弁護士一家遺体発見から二十年になる。

平成七年九月六日の深夜、神奈川県警の警察官がわが家を訪ねて来た用件は、蜘蛛の研究者の夫に、持参した蜘蛛の名前を訊きたいという事だった。富山県魚津市の僧ヶ岳で坂本弁護士の妻、都子さんが遺体で発見された。犯人は蟹を食べながら穴を掘り、都子さんの遺体を埋めたという。遺体発見の穴の近くに蜘蛛がいた。それを持って我が家に来た。つまり、警官はその日に遺体発見現場の富山県魚津市から直接来たのだった。蝶の捕獲に使う三角紙に入れられた蜘蛛はつぶれて傷んでいたが、死体の上で発見されることがあるという「コタナグモ（別名モグラグモ）」だ

と判定できたらしい。蜘蛛は遺体になにか影響したか、あるいは犯行状況の手がかりになるかという質問があり、夫は影響はないと考えられると答えたという。犯行現場の物は、たとえ一匹の蜘蛛であっても全て保管され調査される。

平成八年元旦、神奈川県警から年賀状が届いた。「調査に協力ありがとうございました」という丁寧な内容のものでした。

この悲劇は風化させてはならない。形は変わったが教団は残っている。次第に信者が増える傾向にある。当然だが、警察官は事件が起きなければ踏み込んで捜査したり、逮捕したりできない。